

魅力ある国際会議をめざして

—第3回日中地盤工学シンポジウム（重慶）—

Aiming at an Attractive International Conference —3rd Sino-Japan Geotechnical Symposium—

赤 木 寛 一 (あかき ひろかず)

早稲田大学教授 理工学術院

1. はじめに

地盤工学分野は多くの先見性、視野の広さを備えた先達に恵まれて、国際学会と国内学会の垣根が他の工学分野と比較すると低いように思われる。筆者もその伝統に触発されて、昭和60年（1985年）8月、米国、サンフランシスコで開催された第11回国際土質基礎工学会議に新米大学教員として参加して以来、年に2、3回は国際会議に出席してきた。サンフランシスコ会議は、筆者の初の海外渡航ということもあって極度の緊張感と論文でしか知らない世界の著名な先生方の顔が見られるという高揚感を持って、参加することができた¹⁾。

ところが、最近自分が年をとったせいかもしれないが、国際会議に出席しても以前のような高揚感が感じられなくなってきた。これはまずいなあとと思いながら臨んだのが、今回の中国、重慶から乗船した三峡下りの船上で開催された第3回日中地盤工学シンポジウムであった。

2. 会議の概要

日時：2007年11月4日～7日

場所：揚子江三峡下り（重慶，宜昌間），ビクトリア7号船上

参加者数：99名（中国側45名，日本側54名）

論文数：93編（内，Keynote papers 4編）

口頭発表論文数：57編（内，Keynote speaking 6編）

11月4日午後に、重慶市朝天門埠頭からビクトリア7号に乗船し、3泊4日の三峡下り船上での会議がスタートした。三峡下り船上というユニークな条件での会議開催は、中国側組織委員長を務める清華大学、張健民教授の発案に基づいて、学術委員会委員長の北京航空航天大学、姚仰平教授の尽力によって実現できたものである。

今回のProceedingsのタイトルは、“New frontiers in Chinese and Japanese geotechniques”と名づけられており、日中の地盤工学の最前線に関する研究が発表された。会議初日夕刻の開会式の後、日本側の名古屋工業大学、中井照夫教授のKeynote speakingで会議が始まった。一般論文発表は、会議2日目と3日目の各2時間程度の3セッションにわたって、1編5分の発表時間が割り当てられて行われた。日中の互いに英語を母国語としない参加者が、英語を用いて発表を行うことはかなりの負担ではあるが、日中双方の参加者にとって貴重な経

験となるものである。研究内容としては、精緻な構成モデルに基づいた数値解析手法を静的、動的な地盤工学問題に適用したものが多く見受けられた。

船上での会議開催のメリットは、何と言っても船という逃げ出すことのできない環境下で3泊4日にわたり参加者が文字どおり寝食をともにできることであった。一般発表時間は5分という限られた時間であったが、セッション終了後もお互いに顔をあわせざるをえないので、互いの研究に関する情報交換を行うことができた。さらに、途中では三峡、そして小三峡など名勝地を楽しむとともに、最終日には完成間近のビッグプロジェクト、三峡ダムの見学ができたことも感銘深かった。何と言っても、揚子江の悠々たる流れの中に身を置いて、中国4000年の歴史の重みを実感した3泊4日であった。

3. 魅力ある国際会議をめざして

今回の会議の成功を受けて日中の組織委員会、学術委員会の関係者で、次回の日中シンポジウムの開催場所の検討が行われた。これまでの3回のシンポジウムは、いずれも中国側の参加者の便宜を考慮して中国で開催されてきた。そこで、今回は日本での開催を検討することとした。検討の前提条件として、今回の会議成功の分析が行われた。船上でのシンポジウムの利点は前述のように、逃げ出すことのできない条件下で参加者が顔を常につき合わせた環境におかれることとともに、名勝地への訪問が容易であることであった。

この分析をふまえて、次回の日中地盤工学シンポジウムは、2009年11月に沖縄県で開催することで合意した。日中の地盤工学研究者が魅力にあふれた沖縄の地に集い、密着した雰囲気での討議を通して、日中の絆を深める魅力ある国際会議としたいと考えている。

なお、会議の日本側取りまとめにあたり、名古屋工業大学、張教授、千葉工業大学、小宮教授には大変なお手数をおかけした。記して、謝意を表する。

参 考 文 献

- 1) 赤木寛一：土工事が周辺構造物に及ぼす影響（特集：第11回国際土質基礎工学会議），土と基礎，Vol. 34, No. 3, p. 49, 1986.

(原稿受理 2007.12.20)